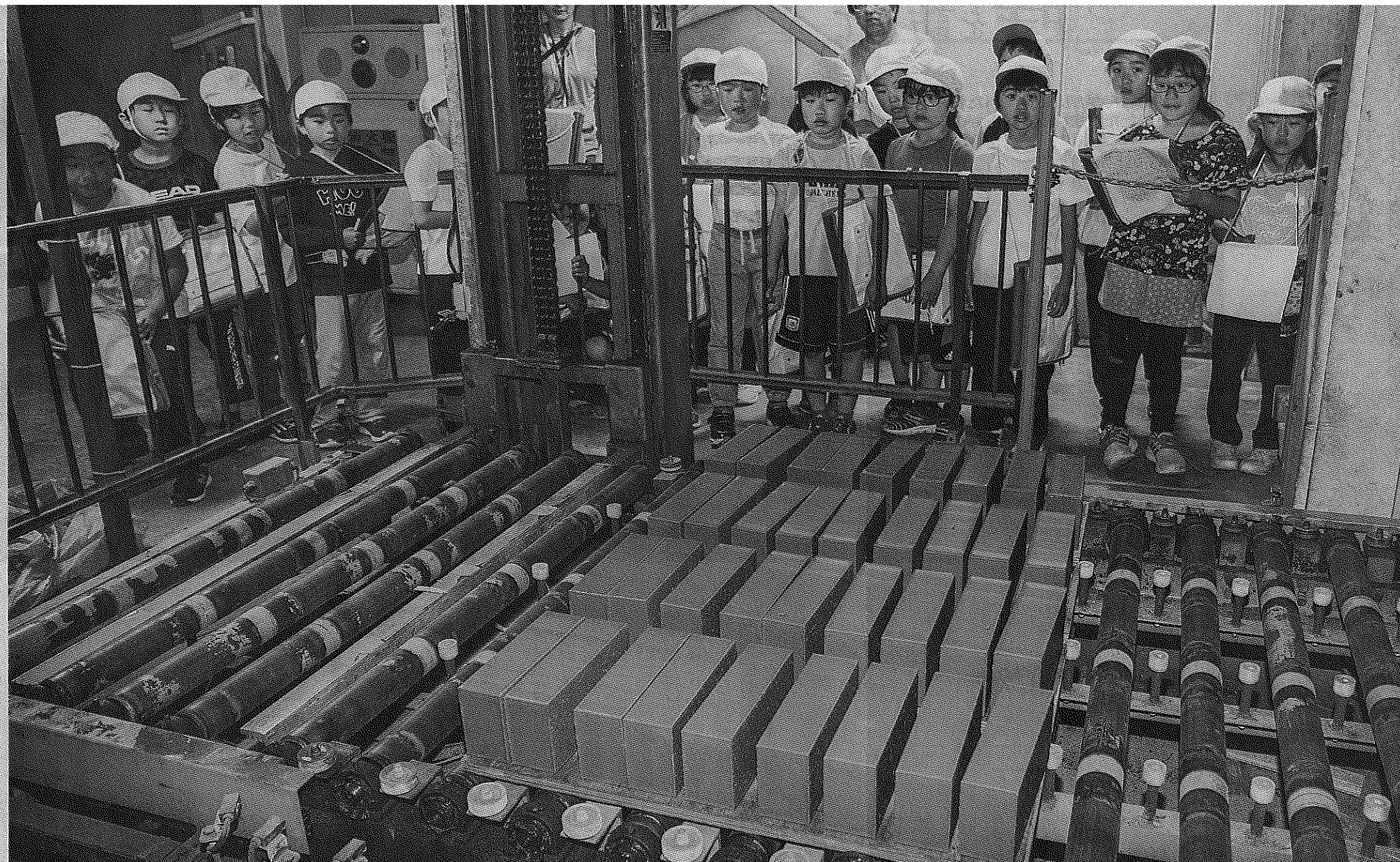


# 時を訪ねて

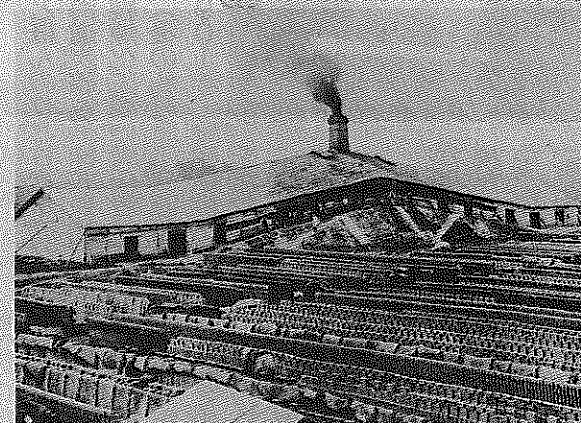


ピアノ線で直方体に切断された粘土が流れるれんが製造ライン。見学に訪れた小学生たちも興味津々の表情で眺めていた＝昭和窯業

## 橋や住宅建築 開拓の礎

### れんが製造

江別



1898年(明治31年)、北海道炭礦(たんこう)鉄道株式会社が建設した野幌煉化(れんが)工場(「野幌窯業史」から)

ピアノ線でれんが状に切断された粘土が、製造ラインを流れていた。江別市角山の昭和窯業では、「社会見学」の市内の小学生たちが製造工程を食い入るように眺める。「2週間の乾燥後、窯で3日間、1060度の温度で焼くと赤いれんがになるんだよ」。案内役の上田剛士課長(55)はそう説明した。

江別では同社と米澤煉瓦、丸二北海煉瓦の3社がれんがを製造している。日本れんが協会によると、国内で現在れんがを製造しているのは9社で、道内ではこの3社しかない。同協会の副会長でもある米澤煉瓦の米澤照二社長(59)は話す。「江別市がある野幌丘陵には表土の下に厚さ2、3分の粘土層があり、地形が平坦で採取しやすく、昔も今も安定して原料を調達できることが大きいのです」

国内のれんが製造は幕末以降に本格化し、道内では当初道南が主体だった。しかし北海道開拓の礎としてれんが需要が広がるにつれて生産の中心は道央に移り、1891年(明治24年)に江別で製造が始まる。

原料や燃料調達の利便性、大消費地札幌への近さなどから、やがて江別に集約。この地のれんがは鉄道のトンネルや橋、倉庫、サイロ、一般住宅や公共施設の建築など、各地の交通網や街づくりで重要な役割を担った。

江別では1950年当時、野幌駅を中心とした野幌地区に窯業会社が15社あり、うち約10社がれんがを製造していた。しかしコンクリートの普及に押されて、70年代半ばには3社体制になった。現在は関東以北唯一の生産地として、本州方面からの引き合いも多い。

江別市セラミックアートセンターでは、れんが製造の歴史を発信する展示や企画に力を入れている。兼平一志芸員(47)は言う。「このマチには、野幌丘陵で採取される粘土、工場、施工会社があり、そしてこのセンターがあります。『江別のれんが』は北海道遺産に指定されていますが、現在進行形の貴重な産業であることを伝えていきたい」

文・黒川 伸一

写真・桜井 徳直

＝2面に続く